
満月の真実

りっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月の真実

【Nコード】

N3078G

【作者名】

りっこ

【あらすじ】

島の人口がどんどん減っていく中、少女も早く島を出たいと願っている。そんな少女に祖母が話すこの島に伝わる浦島太郎の物語。なぜ太郎は玉手箱を開けてしまったのか。老人となってしまった太郎の最期は…。

孫は毎日のようにこの島から出て行きたいのだと嘆いている。住人の大半が親戚だと言っても過言ではないこの小さな島では、年々若者が街へ飛び出し人口は著しく減少していた。コンビニなど島全体で三店舗しかないし娯楽施設もない。買い物だって洒落たショッピングセンターなどあるはずもなく、孫はいつだって自転車で三十分もかかるコンビニまで買いに行った雑誌を眺めながらため息をつく。大学は絶対に本土へ行くのだと息巻いている。私も若い頃は早くこの島から出たいと願っていたものだ。けれど結局この島で一生を終える。ある時を境に私はこの島を愛しく思うようになった。私の祖母から聞いた昔話がそう思わせた。

「はあ…。」

台所でナスを漬けていると居間から大きなため息が聞こえてきた。テーブルに頬杖をつき、いつものつまらなそうな顔で雑誌をめくっている。私もそうだったなあと昔を思い返してみる。私が感じたように孫もこの島を愛するようになるかわからない。今と気持ちが変わらなくてもいい。ただ話したかった。この島に語り継がれる物語を。

流し台で手を洗い、エプロンで拭く。最近ではちょっとした事で腰が痛むようになった。私も年をとったものだ。孫の斜めに腰掛ける。お茶を飲む？と声をかけるといらないと首を振った。テーブルの上の急須を手に取り台所に置いているポットのお湯を注ぐとテーブルに手をついた。もう手をつかないと立てない。ああ、歳をとるのは嫌だ。

「やっぱ飲むから私がいれる。」

私の手から急須をとると孫はさっさと台所に消えた。歳をとるのも悪くないものだと思ってみる。すぐに孫は湯のみを二つ持ってきてきた。縁側から見える庭には小さな紅葉の木が葉を真っ赤に染

めていた。

「ありがとう。」

孫は何も言わず目線は変わらず下にある。温かい湯のみを膝の上で持ち、はらはらと赤い葉が舞うのを見つめる。今まで孫にこの話をしなかったのに特に理由はなかったが、今なんとなく話すべき時がきたな、とただそう思う。私は祖母に聞かされた、愛しく、そして悲しい物語をゆっくり孫に語って聞かせよう。かつて祖母がそうしてくれたように。

私が話し出しても最初のほうは雑誌に目を落としたまま、ふーんと相槌を打っただけだった。そうするうちに孫は関心を持ったのか、私の目を見て聞くようになった。

これは昔話。誰もが知っている物語の真実がここにある。

「お氣をつけてお帰りになってくださいね。」

美しい女性がにっこりと笑いかける。この世のものとは思えない程に美しい容姿で高価な衣服を身に着けている。青ともピンクとも言えない七色に輝く羽衣は艶やかな黒髪と共になびいている。

そんな彼女の笑顔の先には打って変わってみすばらしい少年がいる。顔立ちは悪くはないが身に着けているものの格が違う。着物の裾がはだけていたり、いたるところの布が薄くなっている。だけど少年の笑顔は綺麗だった。そこに邪心などなく純粹さが伝わる。年齢にしては少々高い声で少年は礼を述べる。

「ありがとう！すっごく楽しかった！こんなに笑ったのは久しぶりだよ！乙姫様にはいろいろよくしてもらって：俺絶対このこと忘れないよ！」

乙姫はにっこりと笑う。誰もが幸せになるような、そんな笑顔だった。

「いいえ、こちらこそありがとうございます。そう言っていただけると竜宮城の皆も喜ぶでしょう。太郎様がいらしてから皆にも多く笑顔が見られました。本当に楽しゅうございましたね。」

「いろいろ落ち込んでたから…本当に元気になったよ。蒼幻もういじめられたりすんなよ！」

太郎が目を向けた先には普通の海がめよりも一回り小さい蒼幻がいた。太郎は子どもに苛められている蒼幻を助けた札と言われ、海の底の城、竜宮城に迎えられていた。二週間滞在し、今日がお別れの日だ。太郎は明るく真っ直ぐな少年だったので竜宮城の皆にとっても愛された。今まで数名の人間をここに迎えてきたが、その中でも一番気に入られていた。乙姫も素直な太郎をとっても好きだった。いつもなら渡さないが今回だけ特別に太郎に贈り物を用意していた。

「太郎様、帰りも私が送ります。背中にお乗りください。」

蒼幻が甲羅を首で示すと太郎は勢いよく飛び乗った。するとすかさず乙姫が太郎のそばへ近寄り、何もない空間からあつという間に黒い箱を出現させた。それを太郎に差し出すと再び乙姫は笑った。

「これは贈り物です。どうぞお持ち帰りください。」

「え、いいよ！もう十分お礼はもらったから…」

「いいえ、いけません！どうぞお受け取りください。持っているだけならよいでしょう？」

太郎は押しに負けておずおずと受け取った。乙姫は満足そうに微笑む。

「太郎様、ご忠告申し上げます。決してこの玉手箱を開けなさいますな。よいですか？何があっても開けてはなりませんよ？」

その気迫に圧倒された太郎は生唾を飲み込むと深く頷いた。そして蒼幻の背に揺られながら現の世へと帰っていった。

「乙姫様、太郎様に何を持たせたのです？」

乙姫に一番近い侍女、雨瑠が訊ねた。乙姫がいたずらっ子がす

るような表情を見せると、雨瑠は嫌な予感を抱いた。大抵そういった予感の中のしてしまうものだ。

「あの玉手箱はわらわと太郎様の世界を繋ぐもの。これから太郎様のお傍に仕えようと思ってな。その依り代ぞ。」

「：ご冗談は大概になさいませ。この城の主が現へ行くなどもつてのほか。あつてはならぬことでございます。私は断固反対でございます。」

「そなたはならぬと申すか。だがわらわはもう決めたのじゃ。主が決めたことなのじゃ。従ってもらうぞ。」

乙姫の目には鋭さが宿る。それでも雨瑠は引き下がるわけにはいかない。もし主がここを去ってしまうばここで暮らすものたちは消滅してしまう。乙姫もそれをわかっているはずだ。だからそうさせない策があつてのことだろう。雨瑠はそれが知りたかった。

「消滅？何を言うか！そなたらを消しはせぬ。そのための依り代なのだから。ここに本体を置いてゆく。むこうの世界に行くのはわらわの魂だけじゃ。思念を飛ばし依り代により肉体を得る。それにずっとむこうに留まる気などない。太郎様に家族ができるまでの話じゃ。」

雨瑠はひとまず胸を撫で下ろし、乙姫の言葉にはっとする。

「あ：そうか。太郎様はお父上様を亡くされたばかりですからね。ですが乙姫様御自ら行かれる必要はないのでは？」

乙姫は形の良い眉を歪ませ俯く。長いまつげはしっとりと濡れている。

「母を幼くして亡くし、父も：。仕方がないこととはいえ、海が太郎様のお父上をさらったのだ。わらわに全く関係がないとは言いきれぬ。だから自ら行くのじゃ。わらわは太郎様を気に入っているしな。どんな風に成長するのかこの目で見ていたいじゃ。さあ、もう何も言ってくれるなよ、雨瑠。」

乙姫の目に揺るぎはなかった。完璧に付け入る隙を与えず、雨瑠は黙ることしかできなかった。それを確かめた乙姫は小さい子ども

のように誇らしげに笑った。

太郎は海岸を歩いていた。二週間の出来事が夢かと思えるほど、現の世は何も変わっていないかった。手に持った玉手箱だけが唯一あれが夢ではなかったことを物語っている。

「…これなんなんだろう。」

玉手箱は軽い。振ってみても音は聞こえない。乙姫との約束があるから開けようなんて思わないけど、多少は中身が気になる。太郎はじつと玉手箱を見ていたが首を傾げるとすぐに進行方向に目を向け、再び歩き出した。

しばらく歩くと小さな古い家屋が見えてきた。弱い雨でも雨漏りをし、少し強めの風が吹けばそのまま飛ばされそうに見える。このみすばらしい小屋が太郎の家だった。この小さな家に母が死んでからは父と二人で暮らしていた。もともと母親は体の弱い人で太郎を産んでからはずっと床に臥せていた。太郎はそんな母親の代わりに幼い頃から家事を頑張っていた。父は漁から戻るといつも太郎を褒めてくれた。母の優しい笑顔と父の勇敢な笑顔で育った太郎は本当に真っ直ぐな子どもだった。ところが太郎が六歳の時に母親が死んでしまった。とても悲しかったけれど父親が隣りで笑っていてくれたおかげで太郎は立ち直ることができた。そんな父親も最近死んだ。漁に出てそのまま行方不明になったらしい。十二歳で一人きりになってしまい、大人に混じって漁に出ても、友達と遊んでいても心から笑うことなんてなかった。その時は楽しいと感じても家に帰ってしまえば涙が止まらなかった。いつも少し狭いと思っていた空間なのに、今では広すぎだと感じていた。父がそこにいないこと、太郎の大半を作っていたものがなくなって彼の心は弱っていた。そんな時に漁の帰りに蒼幻を助けたことで竜宮城へ行くことになる。竜宮城では見たこともない人々とのふれあいに最初は戸惑いつつも、太郎はどんどんその環境に慣れていった。最初の二日は海の中

で呼吸できることにもいちいち驚いていたし、人魚や半漁人たちと会話する度にえらを触ってみてもいい？など好奇心旺盛に騒いでいた。あつという間に見たもの、聞いたものを自分の中に消化し、三日目からはもともとそこの住民であつたかのように違和感なく溶け込んでいた。

新しい環境が太郎の心の栄養剤になったのだろう。太郎は久しぶりに本気で笑っていた。本人も気付かないうちに心が軽くなっていた。

しかし我が家に帰ってきてきて実感する。これからは一人なのだと。竜宮城は本当に楽しかった。だがあれは夢だったのだと言い聞かせないと、今のこの寂しさに打ち勝てないと思った。太郎は玉手箱を一番端に置くと山で狩ったウサギの毛皮で丁寧に包んだ。これからは一人なのだ。

さて、帰ってきたはいいが食料がない。残っていてもさすがに二週間前のものを口にするのはためらわれる。もうすぐ日が落ちるので山に入って木の実でも採ってこようと戸口に手をかけた。がらつと戸を開いたすぐそこには見ず知らずの少女が立っていた。少女はちょうど戸を叩くところだったのだろう。拳を胸の前に突き出していた。太郎と目が合うとにっこり笑って頭を下げた。

「これからお世話になります珊瑚です。どうぞよろしく。」

太郎は自分よりも五つぐらい上であるだろうその人のつむじを見つつ事態を飲み込もうと頑張ったが、なんのことだかさっぱりわからなかった。下げた頭を勢いよく定位置に戻すと背中に背負った風呂敷を持ち直し食料です、と太郎の前に差し出した。

「えっと…とりあえずどうぞ。」

説明をしてもらうのが早いと思った太郎は家にあがってもらうことにした。珊瑚が持ち出した風呂敷の中には海の幸が山ほど入っていた。太郎がお礼を言って早速調理しようとする、すかさず珊瑚が立ち上がった。

「あの器使ってよろしいんですね？太郎様は座っていてくださいいま

せ！私がやりますわ！」

意気揚々と腕まくりをする。勢いに負けて太郎は腰を下ろしたまま正体不明の彼女を見守る。任せて、と言ったわりに手際が悪く思わず太郎は隣りに立って魚をさばく手伝いをした。初めこそ珊瑚は頑なに断ろうとしたが、太郎の手際を見て今度は真似ながらぎこちない手つきでさばいた。囲炉裏に炭をくべ火をおこす。火がおこったところに底の深い器を天井から吊る。水釜の水は悪くなっていなかったので器にそれを注ぐ。沸騰してくると先ほどさばいた魚を入れ、岩塩を少々振って煮立たせる。その手順をじーっと見ていた珊瑚は感嘆の声をあげた。

「太郎様はなんでもできるのですねえ……」

太郎が苦笑する頃には料理は出来上がっていた。父が使っていた器にできたばかりの特製魚鍋をついで珊瑚に手渡す。珊瑚はいただきます、と手を合わせ竹でできた箸を器用に使い食べる。太郎は自分の器にも盛る。

「おいしい……！」

珊瑚は口元を押さえて目をまん丸にしていた。

「質素だと思っただけれど……すごくおいしいです！太郎様すごいです！」

「それはよかった。」

二人とも笑顔で食事をする。あっという間に大きい器の中が空になった。満腹になった二人はようやく状況の話をする。

「乙姫様がそんなことを？」

「ええ。乙姫様は竜宮城を離れることができないので私がしばらくの間太郎様のお世話を仰せつかったのです。」

「でももういっぱいお礼してもらったのに……なんだか悪いよ。」

「そんなことを仰らないでください！私はまだ何も出来ませんが……少しずつ覚えていきます！必ずお役に立ってみせます！ですからお願いです！どうか私をお傍においてくださいませ！」

うーん、と太郎はうなる。実際一人じゃないって事は有難いのだ

けれどそこまで甘えてしまっているものだろうか。珊瑚を見る。彼女の目は真剣だ。太郎は頷いた。

「わかった。珊瑚さんがそれを望むのなら好きにしていよいよ。」
若干瞳に膜が張っていたがその言葉を聞くとぽあっと表情が明るくなった。

「ありがとうございます！ではこれからよろしくお願いいたします！」

「うん、こちらこそよろしく……って敬語はやめようよ。珊瑚さんて俺より年上でしょ？様も……これから一緒に暮らすんだし他人行儀はなしで。」

「よ、よろしいのですか？」

「うん、その方がいいな。太郎って呼んでよ。」

「では私のことも珊瑚とお呼びください。」

「また敬語になってる……竜宮城の人達って敬語が癖？……まあいや。少しずつ敬語やめていってね。珊瑚。」

「はい！」

それから太郎と珊瑚の二人暮らしが始まった。珊瑚は家事一般全てにおいて経験がなく、太郎が一から教えていくことになった。太郎は自分がするというのが、珊瑚が決めてさせなかった。太郎に教わったことを一生懸命にこなしていき、二ヶ月もすると太郎は漁に専念できるようにまでなった。相変わらず珊瑚の敬語は治らなかったが、二人はみるみるうちに打ち解けていった。

それから五年が経った。出会った頃はまだ少し珊瑚を見上げていた太郎だが、今では頭ひとつ分太郎の方が背が高かった。太郎が日に日に成長していくのに対して、珊瑚の姿は全く変わらなかった。太郎が一度珊瑚は老けないねと言ったら、竜宮城の人々は寿命が長く成長速度が違うのだと説明された。以前は二人で並ぶと姉弟のよ

うにしか見えなかったが、今では立派な恋人同士に見える。實際太郎の年になれば嫁をもらうのも早すぎるという年齢でもなかった。ちょうど今が適齢期で珊瑚は幾度となく太郎に探りを入れていたのだが、全てかわされていた。

この日も珊瑚は海が見える丘のうえに来ていた。ここに太郎の母親が眠っている。来る前の道で摘んだ花を供え手を合わせる。太郎は今日も立派に漁に出られていますよ、いつもの報告をする。今日は魚を日干ししていたのでいつもより遅くなってしまった。太陽は高く、太郎が漁から帰ってくる時間帯だったので迎えに行こうと丘を後にして海岸沿いを歩く。予想通り太郎の船が帰ってくるところだった。声をかけようと近づくと珊瑚よりも先に太郎に声をかけたものがいた。その少女には見覚えがある。何度か太郎と一緒にいるところを見たことがある。思わず岩陰に隠れて様子を窺う。すると少女は後ろ手に持っていた何かを太郎に差し出すとすぐに走り去っていった。太郎は渡されたものを見て首を傾げている。珊瑚には一目瞭然だった。彼女は太郎を好きなのだ。胸がチクリと痛んだような気がした。なんとなく太郎に声をかけづらくその場を一人後にした。これこそ珊瑚の望んだことだ。少女とうまくいけば太郎に家族ができる。太郎が孤独に苦しむこともなくなる。そう思うのに：やっぱり胸の辺りが軋んだ。

「おかえり、どこ行ってた？ いなかったからびっくりした。」

珊瑚がようやく家に帰るとすでに太郎がいた。目を合わせずに適当な言い訳を述べる。太郎は特に詮索せずに今日の収獲を珊瑚に見せた。五年前では考えられないような大物を最近では簡単に獲ってくる。成長したんだ：と珊瑚はしみじみ思った。そして気付いたら口に出してしまっていた。

「え？ 見てたの？」

「あ、えっと：ちょうど通りがかって！ あの方は何度か見たことがあります。」

「言ってなかったっけ？ 花は幼馴染だよ。父さんがいなくなる前は

よく一緒に遊んでた。俺が漁に出るようになってからは疎遠になつたけど。」

また胸が痛んだ。これはいい傾向なのに、心から喜べない自分が信じられなかった。珊瑚は取り返しのつかない想いを抱いてしまっていた。それに気付いてしまった今、できるだけ早く太郎の傍から離れなければいけない。早く二人を夫婦にしなければ。

「そうですか。：仲がよろしかったのですね。」

「うん、まあそうかな。でも今日久々に会った。女の子は少し会わないだけであんなに変わるんだね。びっくりした。」

ああ：早く行動を起こさなければいけない。太郎の笑顔を見て珊瑚は硬く決意した。

次の日、珊瑚は花の家を訪れた。気を遣えば容易なことだ。花は珊瑚を警戒したが彼女の話聞くうちにそれは解かれた。珊瑚は全て話し終わり了承を得るとお礼を述べ、そのまま家に帰らずあの丘へ向かった。早ければ明日にでも竜宮城に戻ることになる。

「わらわは母親になったつもりでおった：。だがいつのまにか違う想いに変わっていたようじゃ：。五年前はこんなこと思ひもしなかった。ただあの子がかわいかっただけじゃ：。のう、わらわはそなたの代わりになれば：そう思っておっただけだというに：。」

丸い石に向かって呟く。珊瑚は泣いていた。花にした話、それは大まかに言えば太郎の嫁に來いということだった。昨日の太郎を見れば花を嫌いではないだろうことは容易に想像がつく。だから珊瑚が今まで行ってきた家事を花に任せると言っただけだ。最初は花も断ったが太郎は鈍感だからそのくらいしないと気付かないと言うと納得したようで、最終的には頷いてくれた。漁から帰ってきた太郎は何を思うだろう。待っているはずの珊瑚がおらず、花が食事を作っているのだ。五年という短い間で珊瑚の場所はある家だけになつていた。太郎の隣りだった。それが一瞬にして崩れ去るのだと思ふと泣かずにはいられなかった。風が珊瑚の長い髪をなびかせる。濡れた頬を乾かそうとするが、次から次へ流れる涙は乾かない。水

平線は遙かかなたまで広がる。きつと今日も大物を獲ってくるのだろう。笑顔の太郎が目には浮かぶ。

「わらわは…太郎に幸せになってもらいたい。わらわはわらわの本来の場所で太郎の幸せを願おう…。」

今日は全然獲れなかった。太郎は肩を落として漁から帰ってきた。夕方まで粘ったが無理だった、こんなに調子が悪いのは久しぶりのことだ。手ぶらで帰るのは気が引けたので山で狩りでもしようかと思っただが、帰りが遅いのを珊瑚は心配しているかもしれない。太郎はそう思っただ度帰ってから山へ入ろうと決めた。

落ちていく夕陽に目を細めながらそういえば今日は満月だったことを思い出す。珊瑚を月見に誘うのも楽しそうだ、と笑顔を浮かべながら帰路についた。そして戸を開けてただいまと言う。すでに食事を作っていたのだろう。家に近づく

いい匂いが周辺に漂っていた。囲炉裏に座るその人を見て、太郎の動きが止まった。

「え、なんで？」

開口一番がそれだった。そこにいたのは珊瑚ではなく花だった。花は頬を赤らめたままもじもじしている。二日連続で会うなんて珍しい。しかも家で食事を作っている。太郎は状況を飲み込めなかった。

「なんでいるの？珊瑚は？」

「さ、珊瑚さんは急に帰らなくちゃいけなくなったらしくて、これから私に家事を任せるって…」

「何それ…。本当に珊瑚がそう言ったの？」

この家で珊瑚以外の声を聞くのは久しく、違和感だけが残る。太郎の異変が容易に花には伝わった。戸惑いながら頷く。太郎は急いで外へ向かうが戸口に手をかけると一瞬だけ動きを止め、花に向かって冷たい言葉を投げつけた。

「もし珊瑚がいなくなっても俺は一人で大丈夫だから。花はここに

来ないで。」

彼女の反応を見もせずに走り出す。心当たりはひとつしかなかった。珊瑚の行きそうなところ、それは…………

夕陽が海に沈む。珊瑚はまだ丘にいた。太郎が帰ってきたのがここから見えたが、そのまま見ないふりをした。一度波立った心は多少落ち着きを取り戻してもちよつとのことでまた暴れだす。珊瑚は小さな墓石の前で体操座りをした。家には帰れないけれど他に行くところもない。仕方がないので夜になるまではここにしていることにした。月が出たらまた考えよう。

「…ただ事が起こるのを待つというのも…心穏やかではおられぬものですね…。まさかこんなことを思うようになるなんて…。わらわは長くこつちに居すぎたのでしょうか…。」

静かに涙が頬をつたう。どんどん空が濃紺に染まる。少し肌寒くなってくる。考えないようにすればするほど太郎の笑顔が脳裏に浮かぶ。堪えていた涙が加速する。もう止めようとは思わなかった。泣けるだけ泣こう。そして笑ってさよならを告げよう。珊瑚はまだ明るい空に浮かぶ月にそう誓った。

「珊瑚！」

風が丘を駆け抜けた。聞こえるはずのない声が耳に届く。珊瑚は振り返る。そこには太郎が肩を上下させながら立っていた。

「やっぱ…ここか…。」

息が荒い。遠目からでも太郎が苦しそうなのがわかる。珊瑚は涙を拭く余裕さえなく立ち上がり大きな声を出した。

「ど、どうされたんですか？なぜここにいらっしゃるんです？花さん？」

太郎の呼吸が先ほどよりいくらかましになるとゆっくり珊瑚に歩み寄る。珊瑚は太郎を凝視する。月はどんどん輝きを増していた。

「俺に家族を作ろうとしてる？」

珊瑚はギクリとした。ばれた上でここに太郎がいるということはお膳立てをしすぎて機嫌を損ねてしまった可能性もなくはない。計画の失敗が浮かんた。その通り珊瑚の企ては失敗に終わった。

「無理だよ。花って…妹みたいにしか思っていないから。」

「そ、そうですか…。すいません…。」

「…まだ俺に家族作ろうとか思う？」

「う…は、はい。でも次こそは的確な協力を…」

「いくらやっても無駄だよ。俺、嫁とらない。」

下を向いたままだった珊瑚は信じられないものを見るような目で太郎を見上げた。太郎の目に揺るぎはない。その場の思いつきで言っているんじゃないことはすぐにわかった。

「な…：ぜ…：…？なぜですか！？」

「嫁がきたら珊瑚がいなくなっちゃうでしょ？だったら嫁いらない。」

「な！何を仰いますか！私のことなんて気にせずともよいのです！そんな…：そんなことを仰っては私が乙姫様に叱られます！」

太郎は何も言わなかった。ただ真っ直ぐに珊瑚を見つめる。もう日は完全に落ちて空には満月が浮かんでいる。太郎の表情は逆行でよく見えない。でもなんとなく笑っているのが珊瑚にはわかった。

「なんで笑っていらっしゃるのですか！？笑い事ではないんですよ！乙姫様はお怒りになったら恐ろし…！」

言葉は遮られた。気付けば珊瑚は太郎の腕の中にすっぽりとおさまっていた。

「な…：何を…」

「知ってるよ、乙姫。」

強く抱きしめられ身動きができない。手が震える。今この人はなんて言ったのだろう。珊瑚が何も言えないでいると太郎はもう一度言った。

「珊瑚は乙姫でしょ？」

「なんで…：ちが…」

「最初はわからなかったけど一緒にいるうちになんとかそうかな
と思ってた。乙姫と珊瑚の優しさが同じだったから。もしかしたら
って思ってた。でも当たり前でしょ？」

珊瑚は何も言えない。でも太郎は全てわかっているようだ。

「ありがとう。ずっと一緒にいてくれて。珊瑚と暮らすようになってから俺全然寂しくなかったよ。すごい楽しかった。最初の頃なんて珊瑚何もできなかったし…寂しがってる暇なんてなかったよ。俺が乙姫と珊瑚が一緒だって思ったの、それも原因のひとつだよ。だってあの乙姫が選らんだ人なら、なんでも完璧にこなす人だと思うし。家事に無縁な人を仕えさせるかな…もしそれが本人なら考えられなくもないなって。そう思って珊瑚を見てたら根本的ところが乙姫と一緒にだって気付いたんだよ。俺を氣遣ってくれてさりげない優しさをくれる…二年くらい経って二人は同じ人だって確信した。」

「そんなに早く…？わらわは姿かたちも言葉遣いも変えていたのに…。」

「中身だよ。注意して見てればわかる。」

「そうか…ばれていたのですね。ですが家族は作ってもらいます。私もいずれは城へ帰らなければなりません。その前にちゃんとした方をお迎えにならないければ…。」

「だから嫁いらないって。」

「でも！」

「俺は珊瑚と離れたくない。どうしてもって言うんなら珊瑚が嫁にきてよ。」

抱きしめられたままの状態で思わず顔を上げると、太郎の真剣な瞳が近くにあった。冗談で言っているのではないことはわかる。それでも冗談だと思った。何を言ったらいいのかわからずにただ目を見た。

「好きだよ。俺、珊瑚が好きだ。」

みるみるうちに目の前の太郎の顔が滲んでいく。まさかこんなことあるなんて思っていなかった。最初は母親の代わりのつもりで傍

にいたいと願い、一緒に暮らしてから案外頼りがいがあることに気づき、弟の成長を見守っているつもりだった。それがいつしか太郎をひとりの男として好きになっていた。全ては太郎が蒼幻を助けた時から決まっていたことなのだ。行き場のなかった両手を太郎の背中に回す。珊瑚はぎゅっと抱きついた。

「好きじゃ：わらわも太郎が好きじゃ：。」

太郎は五年前と変わらない笑顔で珊瑚を抱きしめた。

「じゃあこれからもよろしく。」

太郎の声が頭上で響く。珊瑚は泣いていた。月の灯りが二人を優しく包む。この時間が永遠だといい：目を閉じて珊瑚は願った。しばらく何も言わずにそうしていると、ふいに珊瑚は顔をあげて家に帰ろうと言った。もう涙は乾いている。

「これからも一緒にいるためにはひとつやらなければならぬことがある。家へ帰ろう。」

松明が無くとも今宵は満月。月明かりのみで十分足元は見える。

二人手を繋いで帰路についた。二人とも笑っていた。

そして家に着くと珊瑚は五年間手をつけられることのなかったウサギの毛皮を持ち出した。

「それは：玉手箱？それ開けちゃいけないじゃ：」

「これはわらわと向こうの世を繋ぐ依り代だったのじゃ。あちらにはわらわの思念を送って竜宮城を保っている。あちらに魂の欠片があるままではいずれあちらに帰らねばならぬ。だから今からこの玉手箱を開けて城にある魂を呼び戻す。太郎、開けてくれるか？」

「でもそれじゃあ竜宮城はどうなる？保ってるってことはその魂を戻すと竜宮城は滅ぶんじゃないの？」

「心配には及ばぬ。あちらは次なる乙姫を決めればよいだけのこと。後継者はもう選んでおる。太郎も知っている雨留じゃ。」

太郎は昔の記憶を一生懸命手繰り寄せ、いつも乙姫の隣にいた人魚のことを思い出した。

「ああ！あの人か！後継者って：竜宮城の仕組みってそんな風にな

ってたんだ。わかった。じゃあ俺が玉手箱を開ければいいんだね？
開けるよ？」

「ああ。…頼む。」

珊瑚は太郎から玉手箱を奪ってしまいたかった。けれど雨溜たちを見捨てることはできない。珊瑚は乙姫だ。竜宮城に戻ることを選んだ。

太郎が玉手箱をゆっくり開ける。徐々に光が飛び出し思わず目を閉じてしまった。

『ありがとう…太郎。わらわは太郎を忘れはしない。未来永劫、忘れはしない。…さようなら。』

溢れんばかりの光の渦で太郎は目を開けることはできなかった。目の前にいるはずの乙姫の声が遠くから聞こえる。太郎は手を出して乙姫を掴もうとするが空を切るばかり。輝く光はやがておさまリ、それは煙へと姿を変えた。煙がおさまると今度は太郎が消えた。太郎がいるはずの場所には白髪を生やした老人が涙を流しながら佇んでいた。

「これがこの島に伝わる浦島太郎の真実。」

孫は泣いていた。私が初めてこの話を聞いた時も泣いてしまったっけ。物思いにふけていると、鼻をすすりながら孫は疑問を投げかけた。

「乙姫はどうして太郎を老人に変えたの？乙姫が帰らなきゃいけないのはかわいそうだと思うけど、太郎を老人にする必要なくない？嫌がらせ？」

思わず笑ってしまった。真剣に聞いた孫は腹を立てたようだ。頬を膨らませて顔を紅葉に染めている。

「なんで笑うの！だってそうじゃん！若いままだったら他の人を好

きになってその人と一緒になっちゃうかもしれないから、それが嫌で老人にしたんでしょ？」

「乙姫は太郎のことを思って老人に変えたのよ。」

孫は納得いかないように眉をしかめたまま首を傾げる。いつのまにか雑誌は閉じられて畳の上に移動していた。

「乙姫は人間が歳をとるとどんどん記憶が曖昧になることを知っていたの。痴呆のことね。乙姫は忘れたほうがいいと思った。太郎が自分を忘れて幸せに生きることを祈った。だから老人に変えたのよ。」

「でもそれってこれから幸せになるかもしれない時間を奪ったってことでしょ？ 乙姫の独りよがりだったんじゃないの？」

「……うーん……太郎のことをよく理解していたからじゃない？」

「？」

「太郎の気持ちは変わらないって思ったんでしょ。乙姫を覚えていたらこれから先ずっと一人で彼女を思い続けるって。」

「……それってすごい自信だね。そんなに信じてたんだ。」

「そうね。……でも太郎は覚えていた。何を忘れても乙姫のことだけは忘れなかった。ほら、海岸の先に少し小高い丘があるでしょう？ その崖よりちょうど人が丸まってるくらいの石があるのわかる？」

「知ってる！ あれ七不思議のひとつだよ！ 海で死んだ人の霊が夜な夜な這い上がってあそこに座ってるって……。」

「そんな話があるの？ まあ……くすくす……その幽霊さんが腰掛けているのが太郎なのよ。乙姫を忘れなかった太郎は死ぬまでずっとあの丘に通ったの。そしてあの場所で眠るように逝ってそのまま時間が彼を石に変えたと伝えられているわ。」

「……へー。なんか結局太郎かわいそうだね。」

「そうねえ、かわいそうだと感じる人もいるようだけど、私の祖母は幸せだったんだろうって言ってたなあ……。」

「なんで！？ めちゃくちゃ悲恋じゃん！」

「んー、好きな人と少しでも心を通わせられたから。そしてその想

いを最期まで貫いたから。：昔は気持ちのまま生きられなかったからね。好きだと言えずに終わってしまうことも多かったみたいよ。」
「：そっか。」

そのまま孫は何か考え込んでいるようだった。私の話はこれで終わり。あとはこの子が何を思うか。この話がこの子の成長にいい影響を与えてくれるといい。もう冷めてしまったお茶を飲み干し庭先を見つめる。遠くに見える空は赤と蒼のグラデーションだ。目を細めてそれを眺める。乙姫は今でもこの空の下で生きた日々を思い返しているだろうか。愛する人と見た月を心に描いているだろうか。

おばあちゃん、と孫が呟いた。遠い海の底の底に思いを馳せていた私の意識はぐいっと現実に戻される。孫の顔を見るとつい先ほどのまでのつまらなそうな表情は消えていた。

「：ありがとう。少し、この島が好きになった：かも。」

最後の言葉は消えかかりながらも、遠くなりつつあるこの耳にしっかりと聞こえた。私が微笑むと孫は柄にも無いことを言って照れたのか私に背を向けて庭を眺める。そして紅葉の葉の間で光る月を見つけてぼそっと呟いた。

「綺麗な満月：。」

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。初投稿です。
この小説は満月を見て思いつきました。悲恋をイメージしたんですが、人によっては何が悲しくて何が幸せなのか分かれるところですよ。恋愛は難しい。

時間の許す限り書いていきたいと思いますので今後ともどうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3078g/>

満月の真実

2011年3月1日23時42分発行